

吉岡 淳

東京・府中にオーガニックカフェ「カフェスロー」を立ち上げたのは 2001 年です。その二年前の 1999 年に環境文化NGO「ナマケモノ倶楽部」の設立に関わりました。ナマケモノ倶楽部は、環境運動に携わる人が、まず自らの生活のありようを地球に負荷をかけないように見直すことを第一の目的に設立されました。カフェスローは、そのナマケモノ倶楽部の活動拠点として「地球に負荷をかけないライフスタイルを提案する」ことを目的に設立され、そのコンセプトを「スロー・カフェ宣言」としてまとめています。

オーガニック・カフェ、フェアトレードショップ、スロー・フード、スロー・ビジネス、スロー・マネー、インフォ・カフェ、スローゼザインの内装と、七つの項目があります。世界の環境のあり方をより良くしていくためには、いかに私たち一人ひとりが自分自身の衣食住の生活の中で無駄を省き、モノと人の命を大事にできるか。それをカフェの食事やさまざまなイベントを通して紹介し、来店した方々に気づいてもらえるかを実践する場です。

▼スロー・ビジネスを始める

僕は 1980 年代後半から 90 年代にかけて、環境や文化遺産の保護活動をするNGOで 30 年間働いてきました。仕事の後半は責任ある立場を任されるようになっていましたが、自分自身の生活に少しずつ疑問を持ち始めていました。NGOの経営は、とにかく資金をどうやって確保するかが最大の業務で、朝早くから夜遅くまで忙しく走り回っていました。確かにそれはそれで大事でやりがいはあるけれども、時々自分の仕事と生活が繋がっていないなと感じていました。地域で活動する仲間と交流すると、自分の住む地域でどんな問題があって、どういう課題に関心が向けられているのか全く知らないことに気づかされるんですね。自分が足元の問題を知らぬまま暮らしているにもかかわらず、世界の平和や環境問題に貢献する仕事に関わっている自負だけはあり、なんとなくそれで満足していました。いかに根無し草の生き方だったかということを思い知らされました。

NGO の仕事を退職後、カリフォルニア州北部のレッドウッド国立公園という世界遺産にも登録されている国立公園に行く機会がありました。この国立公園には 100 メートルを超える杉の群生が残っています。しかし公園の外は、無残にもあちらこちらで森林伐採が進められていました。この現状に地元の若者たちが、この国立公園とカリフォルニア州の州立公園やフンボルト郡の公園をつなぐ緑地を取り戻す運動をしていました。彼らは手作りの藁の家に住んでいました。その室内は、夏に外気温が 35 度の時も家の中は 18 度で、冬は外が零度以下でも家の中は 16 度。冷暖房は使わなくても、ものすごく居心地のよいところでした。その家に住みながら、有機農業をやって、自然エネルギーだけで生活している。せいぜいコンピュータと灯りが一、二個、それからラジオを聴くくらいの電力があれば十分だと言っていました。そういう暮らしをしながら、森を守る運動をしている彼らは、言っていることとやっていることが一致しているわけで、やっぱりこういうあり方でないと本物の環境運動ではないとつくづく考えさせられました。

そんなこともあり、地域の中でカフェを開き、そこを拠点にいろいろなネットワークを築くような仕事がしたいと思うようになりました。ところが、僕自身はそれまで普通のビジネスすらやったことがないわけです。カフェも全くの未経験。そこで考えたのが、通常のビジネス書などに頼らない、非常識と思われるかもしれないが、エコでスローなビジネスをやってみようということになりました。

まずお店の場所は、不動産業が抱えているような店舗ではなく、倉庫や工場の廃屋などを活用した非日常的な空間を作り出し、そこにカフェを開くことにしました。最初に選んだのが自

転車店の倉庫。そのイメージを残しながら内装には珪藻土と藁を使い、自然素材で改装しました。移転後の店舗は、自動車の整備工場の廃屋。藁と珪藻土の内装に加えて、麻の断熱材を張り巡らせました。非常に断熱効率がよくて、エアコンは殆ど使わずに済む感じで、表には小さなソーラーパネルを置き、街灯を照らしています。駅から徒歩5分のところにもかかわらず、新店舗の裏側には川が流れ、すぐそばに雑木林や無農薬野菜の畑があります。そういう風景が広がる中で、ゆっくりくつろいで、自分の暮らしのあり方や環境について考えたりできる癒しの空間が誕生し、その魅力が人々の関心を高めています。

▼「非常識」に思い切る

しかし最初の一、二年は、経営的には持ち出しばかりで、何ともならない状態でした。本当にお客さんが来ないんですね。立ち上げ当初は僕を含め三人のスタッフで、朝の10時半から夜の10時半まで、年中無休で営業して、くたくたになりながら働きました。いつお客さんが来るかわからないのに、でも灯りはつけておかなければいけないし、材料も用意しておかないといけない。家賃だって出ていくし……というしんどい状態でした。

やっと三年目くらいから少しずつお客さんが入り始めました。そこでそれをどのように持続可能にしていくか、常識的ではない形を考えました。まず開店時間を減らしました。最初は年中無休で12時間も開けていたのを、朝の11時から夜7時までに思い切って短くした。それから週に一日を休みにして、さらにその後、週休二日にしました。そうすることで無休のときより逆に売り上げが伸びたんです。スタッフの働きリズムが変わって、5日働いて二日休む。それをきっちり保障することでスタッフの意欲も高まり、お客さんへの対応も変わっていった、すべてがうまく循環したんだと思います。

それから「物を売る」という発想はしないことを心掛けました。提供している商品一つ一つの物語を説明する。どういう経緯でそれがここにあるのか、ということですね。質問を受ければそのことを一生懸命語るわけです。その物語を聞いて人々は強い関心を持ち、結果として商品売れる。そういう考え方に切り替えて、お客さんとスタッフが語り合えるような方向に持っていくんです。

面白い取り組みとして、ひよんなきっかけから「暗闇カフェ」というものもやりました。ちょうどブッシュが大統領になった後、アメリカが京都議定書から離脱することになって、アメリカのNGOから「せめて一年で一番短い夏至の夜は電気を消してろうそくで過ごそう」との呼びかけがありました。これがやってみると実に気持ちよかったです。店内の電気をすべて消して、蜜蝋（みつろう）のろうそくをテーブルに置いてお茶や食事をするんです。BGMも電気を使うCDは使えませんから、生のバイオリンやギター、ピアノの演奏をたのむ。実に贅沢な過ごし方ですよ。

スイスにも「暗闇レストラン」というお店があります。ここは全盲の人たちが経営するレストランで、入口にメニューがあって、食べたいものを選ぶ。そこから先は真っ暗で、全盲のウェイトレスが手を引いて中に案内をしてくれます。真っ暗闇の中で料理が来ても見えないので、最後は手づかみでギャーギャー騒ぎながら食べる。この店は大流行で、半年先まで予約で一杯だというんですね。普通ではあり得ない形態ですが、運営している人たちは、「健常者の人たちの哀れみに助けられてビジネスをしたくない。自分たちが自立的にやりたいんだ」と言っています。「弱さ」を逆手にとって発想を逆転させて、コミュニティレストランが成り立っています。

▼経済成長の神話から自由になる

経済というのは結局、この地球上の資源を使って行う活動のことだと思うんです。つまり経済成長するということは、常にそれだけの資源を浪費することとイコールであると。これまでは経済成長が当たり前のように思われていました。でもじゃあなぜ、経済成長が必要なのかと言われたら、それは世界の一部の金持ちや権力者のためであって、彼らを利する大量生産・大量消費の経済活動によって、ものすごい勢いで環境破壊が進んでいる。そう考えるといかに経済成長せずに、経済をいかにして回していくかという問題がとても重要なわけです。現在のような新自由主義経済の下で一部の人間だけが儲かり、圧倒的多数の人が貧困に陥るような経済

ではなく、三浦梅園が言うところの「経世済民」、つまり経済を円滑に行うことで、民を救うことが求められている。そもそも、民を救えない経済なんて経済ではない。お互い分かち合う、助け合うことが経済活動の基礎にあるべきなんです。

そしてスロー・ビジネスにとって大事なことは、続けていくことと雇用を生み出すことだと思います。たとえばいま、全国にフェアトレードショップが沢山ありますが、採算的にはやはりとても厳しい。カフェスローも、多くの利益を上げようなんて無理な話です。ただ、ひとまず続けていけるだけの経営をすること。言い換えれば、カフェスローのような店が10年、20年先まで続くことが大事であって、そのために必要な最低限の利益を上げるということです。

雇用不安が広がる中で、反貧困運動として僕たちに何ができるかということ、スロー・ビジネスが雇用の受け皿にちゃんとなっていることをアピールすることだと思います。カフェスローは現在は有限会社ですが、月の売上げが約500万円。10人のうち8人がフルタイムです。それを一人でも二人でも増やしていけるよう何とか努力したい。雇用の場を増やすことはとても大事で、いま新しいエコビジネスや社会的企業が生まれていますが、始めた人たちが何とか食べていけばいいということではなく、普通の会社のように人を雇うことができ、人並みに食べていけるだけの給料を出せる職場を構想するべきですね。

▼ローカルからローカルへ

もう一つのこだわりは、障害を持つ人たちが立ち上げるビジネスを応援することです。つい最近も北海道の浦河でカフェをやりたいという人たちがいました。浦河はもともとアイヌの人たちが多く住んでいた場所で、朝鮮から強制連行された人たちが炭鉱で働かされた歴史もあります。さらにその人たちが十勝の方まで連れて行かれているんですが、生活が苦しく逃げ出していった朝鮮人を匿ったのが浦河のアイヌの人たちだった。だから浦河にはアイヌと朝鮮人の夫婦もけっこういるんです。そういう土地に「べてるの家」という、精神障害を持つ人たちが共同生活を営む場所があります。

べてるの家は精神障害を持つ人たちが自ら事業を立ち上げていて、日高昆布を売って年商一億円も稼いでいます。彼らのモットーは「安心して絶望できる人生」です。みんな自分の病名や症状を、統合失調症とかリストカットとか、平気で自己申告して、互いに笑い飛ばして一緒に生きるような関係づくりをしています。いまは全国的にも有名になって、北海道外から移住してくる人もいます。今度そのべてるの家の人たちが「カフェぶらぶら」という店を作り、自分たちの居場所としてだけではなく、地域のひとびととの交流の場としてのカフェを立ち上げたのです。地域からなんとなく疎まれる存在の人々がコミュニティカフェを媒介にして、地域の中で様々な出会いと交流の場作りを演出する、これはとても革命的なことです。

このような町の先例は、オランダのエルメロ市にあります。19世紀に、精神病院が街の核になり、その周りに町が広がっています。その精神病院には一切の垣根がなく、自由に誰でも出入りができる。一見、誰が病院関係者で、誰が患者か見分けもつかない。エルメロ市役所のすぐそばの目抜き通りには、デイケアセンターがあり、その向かいには、身体障がい者が運営するカフェがある。さらにその並びには、精神障がい者の作品を専門的に扱う画廊があり、けっこう有名になった画家もいる。このように町全体がバリアフリーでそれを誰もが当然のごとく受け入れ、競争ではなく、共存している。昨年、2009年にべてるの人々がエルメロを訪問し、交流の機会を

もった。この画期的な出会いは、姉妹関係など近い将来更なる発展を遂げると期待されています。

広がっているスロー・ビジネスの例をもう一つ挙げておくと、北九州の赤村という人口二、三千人の小さな村に「クリキンディ」という小さなカフェがあります。ここでは無農薬で農作物を作ったりして、五人ほどの人が働いていますが、彼らは実質、月に5万円ほどで生活できています。家賃はタダ同然、自分たちで野菜や米を作るので、支出は光熱費くらいなので、5万もあれば十分みたいなんですね。そのカフェは5万円でもビジネスとしてちゃんと成り立つようにしていて、雇用も生み出しながら持続できている。

このように仲間がいて、いろんなアイデアや知恵を出し合いながら協力して立ち上げるビジ

ネスの形や、そのネットワークが、全国にどんどん広がってきている。そこで大事なことは、いかにしてみんなを幸せにするか。つまり幸せのビジネスなんです。マーケティングの世界には「顧客満足度」という言葉がありますが、いまでは「顧客幸福度」が重要なんですね。

これまでの価値とは違う幸せへのアプローチを、私たちがどうやって作ってイけるのか。そこに新しいスロー・ビジネスの可能性があるし、いわゆる社会的企業の意味がある。社会的企業って何？と言ったとき、大上段に語る必要はなくて、いかにそのサービスを受けたり、関わる人たちが幸せになれるのかが大事だと思うんです。僕はこの事業をやってみて、ビジネスっていうのはちゃんとやりたいことを伝えられるし、人を幸せにできるんだ、ということを実感しています。

さて、カフェスローは、ことし、2010年5月にカフェスロー9周年に合わせて、自然食品を取り扱う「おかげさま市場」を立ち上げました。カフェで使っている食材はもちろんのこと、全国各地で豊かな自然からすばらしい

食材を作っている人々の製品を取り扱っている。私たち人間がこうして生きてイけるのも、自然の恵みがえられるからであり、自然や生産者に感謝し、「おかげさま」で豊かな暮らしができていることを実感してもらうことを目的にしている。もちろん地場野菜や豆腐などを中心にし、地域のひとびとに豊かな食材の情報も提供している。

「地域の暮らしをかえることによって、はじめて世界がかわる」と確信しています。コミュニティカフェは、その中核的な担い手の場所なのです。

##プロフィール 吉岡淳

よしおか・あつし／1947年京都府生まれ。有限会社カフェスロー代表。なまけもの倶楽部世話人。日本ユネスコ協会連盟元事務局長。2001年にナマケモノ倶楽部の運動拠点として東京府中市にカフェスローをオープン。8年目に現在の国分寺市に移転し、日本全国各地に「スロー・カフェ」の普及と人材育成に取り組む。

著書に『スローなカフェのつくりかた—暮らしを変える、世界がかわる』『カフェがつなぐ地域と世界—カフェスローへようこそ』ともに（自然食通信社）。「世界遺産基礎ガイド」（マイコミ出版、共著）

現在、関東学院大学経済学部、都留文科大学、大妻女子大学短期大学部で非常勤講師として、「環境・文化学」「平和と人権」「NPO論」などを担当している。またNHK文化センターでは関東8都市で「世界遺産学」を開設している。